第26回　山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

演　題	「てっ！！よく知ってるじゃん！！」
副　題	回想法によるコミュニケーションの活性化を求めて

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ　キョウナンケアホームイイトミ
施　設　名	老人保健施設峡南ケア・ホームいいとみ
フリガナ	カイゴシ　　ワタナベ　ヒロノブ
発表者(職名・氏名)	介護士　　渡辺博信
フリガナ	モチヅキ・ナトリ・サワノボリ・ヤマモト・オサダ・サノ
共同研究者	望月徹・名取亮一・沢登岳・山本和哉・長田麻衣子・佐野耕太

【はじめに】利用者が持参している昔の写真を見て『この方の事をもっと知りたい』と感じたことはないだろうか。当施設のケアプランには『昔の写真を見て思い出話を引き出していく』との内容が多く記載されているが、実際は、利用者に写真を渡し声掛けするだけで終わり、深く介入できていない現状があった。回想法を実際の介護現場で活かし『利用者を知る』『回想法を習慣化する』という目的から、その対象者に対し、昔の写真を見ながら、利用者の声を記入できる思い出ノートを作成した。そのノートを用い回想法を習慣化することで、職員間で利用者を深く知る機会が増え、家族の気持ち、利用者の表情の変化、活性化に繋がったのでここに報告する。

【方法】（令和４年４月～令和５年２月）

対象者：W．M様　対応職員：介護・リハ（計６名）

回想法実施時間

介護：1日15分～20分。リハ：リハビリ時に実施。

＊昔の写真をカラーコピーし思い出ノートに貼付。

＊回想法の方法として、対象者の隣に座り写真を一緒に見ながら、いつ・どこで、だれと・どんな思い出があるかを中心に記入し、間違った内容でも否定しないように配慮する。

＊情報収集した内容を思い出ノートに書き足す。

＊作成した思い出ノートを用い、他職員にも実施を依頼する（回想法は同様）

＊利用者の反応を調査するための表を作成。

＊利用者の表情などを含めた評価・職員が感じた内容などをアンケートする。

＊令和４年８月から家族と思い出ノートにて交換日記を行い、実施後、家族へのアンケートを実施。

【経過・結果・課題】《W．M様の反応》

・回想することで会話や笑顔が多くみられた。

・トイレへ行ったことを忘れ、すぐにトイレに行くという行動が改善された。

・自分から写真を見たいと訴える事が出てきた。

《職員の反応》※アンケート結果より

・対象者の情報不足を感じた。

・時間的に多くの利用者に実施する時間がない。

・新しく知った情報として、生活歴、趣味、日課、家族構成の順で多くを知ることが出来た。

《ご家族の感想》※アンケート結果より

・文字を見るだけで母の今の状態が分かった。

・本人の言葉にほっとした。

・思い出ノートは家族で保存している。

・負担はなく心の支えであり助けになった。

・家族間でもW．Mに関する会話が増えた。

・毎回最後に『洗濯物を持ってきてください、お願いします、Mより』との言葉が嬉しかった。

【考察】今回の取り組みで、利用者の精神的安定やコミュニケーション能力の向上が見られると同時に職員の利用者に対する情報不足を痛感した。

インテークで得た最低限の情報を基に、その人の人生や想いを発掘し、理解することで、より関係性が構築され、初めて寄り添うケアが出来ると考える。『その人の生活歴や習慣、趣味などの背景に着目しサポートすることで、悪化しているように見える認知症の状態も改善できるかもしれない』とトム・キットウッド氏が述べているように、簡単な会話だけではなく、その人の地域、家族、趣味、仕事を含めた会話を取り入れることで、利用者の笑顔や穏やかな表情につながった。

　時間的に多くの利用者に実施する時間がない点については、それぞれの担当介護職員に思い出ノート作成を分担化することや実施時間を明確にすることで、より習慣化されていくと考えられる。

【まとめ】アルバムを見ながら知り得た情報を話すと、利用者から『てっ！！よく知ってるじゃん！！』との一言がとても嬉しく感じた。この取り組みにより知り得た情報を日々のケアの中に取り入れることで、良好なコミュニケーションがとれ、利用者の気持ちの安定につながっている。また利用者と職員間だけでなく家族にも貴重で思い出深い日々になったといえる。今後も利用者がよりよい生活を送れるように、様々な手法を取り入れながら、利用者だけでなくその周りを取り囲む人達に寄り添ったケアを実践していきたい。